

幼児の生活環境と保育

— 都心の子どもたち —



西 本 英 子

私共教師は皆誰れでも幼ない子ども達を保育するに当って、一番先にそして絶えず心にかげ念頭から離れない事は「幼児をよりよい環境においてやりたい」ということであると思います。

このよい環境とはどんな環境をいうのか、と問われたら今までの私でしたらきつと夢のような理想の机上論を平気でならべてしまつたことと思います。けれども最近、所を異にして新しい子ども達の日常の生活にふれ、ずい分珍らしい現象の幾つかを見出し、多くの目新しい事を発見して、今更ながら子どもをとりまく生活環境の影響、生活感の違い、そして私のかげ離れた理想、その考えの甘さなどの反省をさせられております。

こんな事がありました。

入園当初はどこでもなさることと思いますが、出来るだけ楽しい場の設定、緊張を感じさせないゆったりとした雰囲気にと、心をくばって保育室の中に「ままごとや玩具を綺麗に並べ、（新品ではありませんが。）親しみの持てる大きさのお人形などを出してお

きました。小さな子ども達の中には一番先に自分の友達としてお人形を求めるものもいるだろうなどという考えもあり、そつと観察しておりました。ところがお人形は寝かされたまま、手をつける子もありませんでした。

やがて青葉の頃には、楽しい外あそびも多くなりました。またまた私の目には異様なものがうつりました。ジャングルジムやすべり台、ぶらんこに走る子、集る子の少ないこと少ないこと、媒介物、危険物のない広い校庭をとび廻る嬉しそうな顔ばかり、やがてグループが出来て「かけっこ」!!! 汗だくだくで自分を出し切っている姿、野性的な動きによるこびわきたっています。

一方このグループに入れない小さい子どもは足がやつと届くジャングルジムやすべり台で何の抵抗も感じない平気な顔をして遊んでいます。オヤオヤと思った矢先、ジャングル、すべり台のどんな高い所も平気に登り降り出来る背の高い子が床上積木の三十センチ位の高さを登るのに腰をまげてビクビク苦勞している姿もみうけまし

た。

また、こんな事もありました。

庭の隅で二、三人が何か話し合っています。やや荒い語調がきこえましたので、そっと近づいてみますと、何と一匹のたま虫（よく温めつばい所にいて余りきれいなものとは思えません。）を

「僕が見つけたんだ」

「僕が先に見つけたんだよ」

と言い争っています。それをみて私はなんと可哀想な子ども達なのだろうと思ひ、つい

「先生の家の方には一杯いるのに！」と、洩らしてしまいました。

嬉しいことをきいて、にこやかな表情になり

「じゃあ先生！　こんど僕にもって来てよ」

「先生の家ね、夜になると電燈のところへいろいろな虫が飛んで来るのよ、だからこんど持ってきてあげるわね」

「じゃあ指きりしようよ」

さつと積極的に指を出し、約束をさせられてしまいました。ほんとうに強引と言ってもよいほどの頼みに、

「先生虫取り下手だから少しまっててね」と日時の遅れを承認してもらいましたが、そろそろ責任を果さなければならぬ時期が来てしまいました。

（最近園の近くの道路にカナブンブンやカブト虫を売りに来る者がおりますが、一匹十円から五十円と言うのですから驚きます。）

これは二、三の事例ですが、私共の目にはおもしろくもうつり、気の毒にも思われ、また不思議な育ち方でもあると思われました。

しかし幼児を保育する者としてそれだけではいけない。まじめに考えなければならぬ。どうしたらよいだろう、思ひは拡がりました。がそれはやはり子ども達の生活環境をじっと見つめることが解決の道だと思ひました。従来よく行なわれた紙による環境調査も、親の子どもへの教育に対する関心度の研究も、地域の立地的特性的把握もすべて解決していく上の必要手段であり、問題は分析され解明の方向も出てきましようが、私共がまず第一に明日の保育に役立たせる為には、今現に私共とむき出しの生活をしている子ども達の生活の中から、この事を捉えていくことが一番早く、そしてびつたりするのではないかと思ひました。

それからの私共は子ども一人ひとりが幼稚園の生活、或いは地域社会の中でどんな行動をし、どんな会話をささやき合っているか、そしてその裏側にある子ども達のじかに結びついている生活環境とはどんなものか、と意図的な場を捉えたり、意図しない遊びの場など、観察する機会を数多くつくりました。

一番先に書きました「ままごと、お人形」のことから逆に地域環境に目を向けてみますと私共のところは東京の中心地、土一升金一升の町、その土さえ今では植木鉢の中にもみられる位、すっかり舗装されて道路の下となつてしまつています。子どもの遊び場をもつ家庭など考えも及びません。木蔭にごさを敷いて花びらのご馳走、などという昔の私が過ごしたような情景は思うことも無理で未経験の範囲のようでした。

道は自動車の洪水、そこで子ども達は公園へ！、町角の小さな場所には必ずと言ってよいほどぶらんこ、すべり台などの設備された公

園があります。私は初めずい分子ども達のために気を配ってくださると思つたのですが、どこへ行っても画一的な遊具ばかり、そこに遊ぶ子ども達は年寄りに手をひかれた小さな子ども達位のもの、やや育つた子が群がって遊ぶなど見たこともありません。たまに元氣な声が聞こえる時は危険な新しい遊び方を見つけた時位のもので、ジャングルジムやぶらんこは入園前の遊びとしてすっかり体得してしまつて、入園時にはよろこびも興味も新鮮味もなく、子ども達の興味の外に、刺戟の外にあつたのでした。そして子ども自身の体力は余っています。その余つた力を幼稚園の庭で発散させるのです。自動車も何も走らない、危険がない、自分達だけがいる、その現実がむしろ嬉しく、ただただ走る、そして力を消耗させるのです。珍らしい現象の一つであり地域の特性とも言えましょう。

「原っぱのない街の子ども達よ」と言いたくなります。

こうした子ども達の姿から次第に意図しないありのままの生活環境がのぞかれるようになり、その影響が幼ないながらの人間形成の上に、もうかなりの大きな影響を与えていることがわかりました。私共がいつもうたい文句にしている「その地域にふさわしい」という事を真剣に考えなければならぬことをはっきり認識させてくれました。

今まで保育の目標と言えば健康で自主自律の心で……など箇条書きを気やすく言うことができました。けれども日常の子どもの姿をみつめればみつめる程、現実的にはそんな甘くやさしいものではありませんでしたし、理論づくめの美しいこととは別のところに目的があり、その生活があるのが実態だと思ひました。ですから私共

の園ではその地域に立脚した保育の具体的目標の一つに幼児年りの強靱な生活力ある独立心の確立に力を注いで将来どんな生活環境におかれてもへこたれないたくましい雑草の強さを強調しております。生活の町から生まれた根強い意氣（下町根性）でも言うのであれば、）に答えてお互がお互を認め合いながら自分を出し切つて生活する、地についた日々の生活の中から人情もわき出し、知識も拡げていくようです。ですから出来るだけ多くの経験をさせその経験を自分の頭で体で自分自身のものとする体認ということに重きをおいています。

行事に例をとりますが、当園では他の方から見れば少々手荒いと思われような園外保育計画を立案しております。まず園外保育の基礎指導として園外散歩を毎月実施して交通環境になれさせると共に足の鍛錬をして出掛けます。目的地で休憩時も昼食時も幼児自身の判断で身の置きどころから身の処し方まですべて一人でさせます。手間がかかり時間が空費される事ではありますが私共はそこに教育の価値があるのではないかと思つています。その一つに例年初夏に実施する多摩川への園外保育があります。その時は三才児を含め八十名が園長、教諭三名で二千多摩川の川原へ行き、水に親しみ、大氣にふれる一日を過ごすのです。広漠とした川原で自分で脱衣し、自分で衣服の管理をし、水の抵抗を自分で受けとめて身を出し、川を渡り、石を思いきり投げさせ、大地に大空に大声を出し、しかもその中によるこびまでみつつけさせます。

この時も私は川へ行くのだから、綱を用意してあげればよかった、バケツも必要だったかしら、きつと希望するだろうと思つてい

ましたのに、誰ひとり言い出す子はおりません。「川」そのものに興味があつて他の事には及ばないことを知り、改めて考えてしまいました。この一日の川遊びの反省のための子ども同志の話合いの中から「川の向うまで石が行かなかつた」「はだして歩いた石はあつかつた」「川の水は綺麗で冷めたかつた」「川の底がみえた」「足が流された」「土手でころころころがった」などが一番たのしそうなことばつき表情で交わされました。私共を一番驚かしたのは「先生川は流れているね」と言う感想でした。ドンヨリにごつた隅田川の下流に育つ幼児にとつてサラサラ明透な水の音をして流れる川は一つの驚異であるかもしれません。私共が予期した「めだかとり」などはこの子ども達にとつて余りにもかけ離れた経験の領域であつたようです。この一日の楽しく動的なよろこびをみても幼ない時代は、人為的環境設定の中で生活するだけでなく、つとめて自然にかえつて自然に親しむべきである……そしてその自然の中に立たされた子ども達も自分から欲し望んでいることは何かということを教師側がしっかりとつかんでいなければならぬことも教えられました。

このように都会の中心に生活する幼ない子どもの生活の断層をじつとみつめると、幼児をとりまく生活環境の影響が園の生活の中でたくさん出てきました。

一、知識は巾が広く浅く概念的な取得をしている。(環境的に目にふれるものが雑多でありすぎる。)

一、刺戟の強い環境に麻痺している。(強い語調、刺戟の強い内容でなければとびつきにくい。)

一、情緒の欠ける面がある。(自然の事物に対しての感情反応が乏しい。)

一、自然的な現象と人工的なものとの区別の理解が少ない。(四季感、動植物、色彩、構成などの面で新鮮さ適確さをうけとめにくい。)

一、経験範囲、活動範囲が狭い。(発展性が欠ける。)

一、落ちついた生活が少ない。(明るくのびのびしている反面、深くものを思考する力が乏しい。)

一、対人関係では積極的で人情がある。(話は素直に聞き入れられる。)

これらの生活環境から影響されたと思われる良い面、悪い面を受けとめて、適正な園生活のための保育計画を園独自の方針の中に織りこみ立案すべく改善しております。

その実施にあたつても子ども一人ひとりが、生き生きとしかもまじめに生活し、よりよい人間形成がなされるよう心掛けております。ただ生活環境に溺れ、子ども尊重に重きをおきすぎて真の教育を忘れぬよう、そして一般社会の変化にも目をとめて根本から築く幼児教育に熱意を注ぎ、地についた力強い素直な子どもを育てたいと思ひます。

どこの地にあつても、どんな生活の中にあつても変らなく尊いものは童心であり、その清い純な心は変りなく輝いていることを信じます。

(東京都中央区立京橋幼稚園)